

# 情報学の中核にあるもの

— 根源からの再出発を企図して —

An exploration into the core of the information science

村主 朋 英

MURANUSHI, Tomohide

## 1. 序論

### 1.1 目的

虚無に囲まれたのなら、それは好運である。すべてをそこから始めることができるから。置かれた状況は、いまだ絶対的な無とはいえないかもしれない。しかし、予告のようにはしばしば襲ってくる無力感に導かれながら、虚無の到来に備えて思索を行なっておくことは無益ではあるまい。

たとえば、存在が関係に依存するならば、一切の関係を失うことによって無が得られるのだろうか。関係を失った時に、なおも残るもの。それが存在ではないとすれば、いったい何か。本稿では、そのような根源まで立ち戻った考究を目的とする。

### 1.2 方法

論述を唯一の方法として採用する。その際、本稿固有の方針として、基本構成要素となる概念をもみずから構築または再構築しながら反復して考えた成果を揃え、借用を避け、慎重に選択・調整した言葉を用いてそれら思考の成果を再現し、最後にそれらの言葉を論文という形式の下で構成する。

本稿では、一切の引用を行なわない。論考式の論文では、通例、文献の引用（言及、抜粋）を多量に準備し、批判的吟味を付加しながら議論の素材または手段として使用する。本稿における記述または論考も、多くが他者のそれに由来・依拠するか影響を受けるなどの一定の関係を有することだろうし、立証や解説のために既存の成果や表現を引用することは有効な手段である。

しかしそれらの事情は、根源からの考究という当面の課題からすれば些細なことである。解説はもとより、立証の工程も主たる目標に対して付随的なことであり、成果を確保した後にはあらためて行なうこととしたい。依拠や参照に関する責任表示についても、他者の言葉を挿入することが必ず思考に遺漏をもたらすから、それを避けるために労力の追加を要し、代償が大きく見込まれる。そこで、今回はあえて引用を徹底して回避する。

## 2. 問題記述

### 2.1 背景

本稿の形成を促した動機は、情報学に関する問題意識である。したがって、主眼は情報学に関する問題の解決にある。本論に先立ち、本章において本稿の前提とする了解事項を記述する。

情報学 (information science) は、人為的に体裁を整えた経緯ゆえに、始まりを明確に同定できる学術分野である。いくつかの徴しのうち、分野名を冠する代表的学術団体の成立を採るなら、アメリカ情報学会成立年である1968年を起点とし、40年以上の豊かな歴史を持つと認められる。諸要因に左右されるとしても、半世紀に及ぶこの時間は、学術分野 (a discipline) として成熟するために十分な猶予であろう。

米国における情報学の前身は、ドキュメンテーションという名称の応用 (実務・技術) 領域である。ドキュメンテーションの主眼は、科学・技術研究に代表される専門的活動のための文献サービスの促進であったから、あとを継承した情報学も、学術情報流過程に対する関心の強さによって特徴づけられた。ドキュメンテーションはまた、情報検索システム開発の母体となった領域であるため、やはり情報学も情報検索研究を主要な応用領域として展開することとなった。このほか、ドキュメンテーションの諸活動が図書館サービスと並列して展開した経緯ゆえに、情報学においても図書館実務に対して特別な関心が向けられ、学術情報および情報検索に関する成果と結びつきながら重要な一領域を形成した。このような背景から、学術情報流過程と情報検索システムに関する主題群が情報学の主要領域であると受けとめられ、図書館学との密な相互関係を保ちながら知識の組織化という軸線を形成し、それらの特徴が情報学の自己同一性の基幹ともなった。米国では、情報学の歴史や枠組みに対し、このような一定の感覚が共有されている。

それに対し、日本においては情報科学という語が選好され、実際に問題領域や方法論など多くの点で異なる研究が展開された。情報学という語が用いられる場合も、しばしば米国とは異質の学術的状况を見せる。米国型情報学の伝統は、わずかに図書館情報学の関連機関を中心に、怪訝な顔で見過ごされるままに半ば孤立した状態で維持された。その際、「図書館」という語は、代表的な情報学応用領域を指示するとともに、無定見な対象領域の拡張を防ぐ要石の機能を果たしたり、情報学という苗木を直立させる添え木として役立ったりしたのかもしれないが、図書館情報学という語が「図書館や読書に関する高度な学」などと受けとめられるような事態が訪れば、それは一転して制約をもたらす因子となる。それ以前に、その効力は図書館情報学コミュニティの外に及びうるものではない。こうして、結局のところ、情報にかかわる研究について、日本では拘束力のある規範が認められない状態が維持された。

このような事情で、日本では「学際化」が早くから非常に速く進行した。対し、米国にお

いても、初期から（あるいは誕生の以前から）主題範囲の拡張を促されており、実際、展開を進めた。そのうち、早期に生じた科学社会学と行動科学の考えや方法論の導入、並行する工学・数学との連携、認知科学および現象学的社会学への接近という三つの大きな動きは、拡張よりもむしろ固有の基盤の形成に寄与したのかもしれないが、その間を通して多様なトピックがしきりに議論に供され、とりわけコンピュータネットワーク利用の進展に伴って研究対象となる実体または現象が飛躍的に増加した。問題領域が基礎研究と応用の両面で拡大すれば、必然的に、学術情報流通過程と情報検索システムという初期の固有領域の地位は相対的に下がることとなる。

実際には、21世紀と呼ばれる年代に至っても、主要媒体において変わらずにそれらにかかわる研究課題が多く見られる。しかし、そのことが拡張に伴う不安を抑え、一体感の醸成に寄与するとしても、それらを以て情報学を特徴づけることは多彩な展開を果たしつつある情報学の範囲と符合しない。まして、応用領域である図書館学との関係を強調することから利は得られない。

それでは、情報学とは、何を以て特徴づけるのが妥当だろうか。

## 2.2 着眼点

情報学は拡張を続け、数多くの主題領域を内包するに至った。個々の主題領域は、いずれも既存の他分野の影響を個別に受けることとなる。というのは、情報にかかわるすべての現象は、それ以外の要因と必ず関係するからである。

そもそも近代科学は、その円熟期である19世紀に至るまで情報の概念を必要とせず、少なくとも情報またはそれに相当する語形を用いずに世界のすべてを語ろうとしていた。20世紀中葉の情報理論の勃興に促され、情報概念を受け入れても、情報の問題は一般に、常に何か既知の現象もしくは問題と関係づけられて扱われてきた。技巧的に情報という語を用いて論点をくらませたりずらしたりする意図がない限り、他の語で代用することが可能であり、また一般にそれが妥当である。

その経緯を逆から見れば、情報学が対象範囲を拡張すると、必ず既存の何らかの学術分野と遭遇するということになる。その際、多くの場合、ある対象や問題を適切に扱って有効な成果を挙げるという使命達成のために、その対象や問題に関係する他の分野の成果や知識の助力を導入することになるだろう。あるいは、あるときは、その領域がそもそも他の分野の探求するところのもので、情報学は新規参入者であるという図式かもしれない。いずれにせよそうした接触は、異物の吸収・同化では終わらず、その主題領域自体の変容をもたらさだろう。そうして、対象や問題に対して忠実であろうとすれば、個別主題領域は相互に他の主題領域から切り離され、それぞれが半ば独立した別の専門領域となる。

情報学の誕生を「ビッグバン」に喩えるならば、その宇宙はひたすら膨張し、おのおのの主題領域が別個の小宇宙となり、相互の距離が拡大しつづける。そしてついには、同じ一つ

の宇宙の中にあるという名目以外にそれらをまとめる要因がないという段階へと至る。局相として偏りと歪みを含みながらも全体として均質であり、構造からはその性格を特定することができないし、あらゆる対象を併呑しようとする領域であるなら、外殻からその宇宙を記述することはできない。そのため、特徴を見いだすことによって理解しようというアプローチそのものを断念する必要がある。

そこで、ビッグバンに始まり膨張を続ける宇宙の中心部に着目し、そこにあるものを同定することによって全体をgraspする（統合的に把握する）というアプローチを採ることにする。

中心部には、宇宙開闢の時点ですべての因子が集まっていたはずである。しかし、それらはやがて離れ、四散した。およそ対象化の可能な事象は、すべて個別領域を形成し、分離する。永く情報学を特徴づけていた学術情報と情報検索という2領域とて、もはや特別な地位になく、そもそも元来それぞれ特定の対象に焦点を当てる個別主題領域群である以上、中心であると見なすのは不適當である。

情報学の中心部には、いったい何があるだろうか。

### 3. 情報学の中核となるもの

#### 3.1 それは情報ではない

まず確認したいのは、「情報学なのだから情報が中心」と考える必要はないという点である。

情報学という名称は情報という語のみを冠し、そしてその語は情報学の研究と応用に携わるすべての専門家とその受益者によって共通して頻繁に用いられるから、外見の上では情報学の中心に誠に相応しい。しかしながら、肝腎な点は、文字列として用いられることではなく、概念のレベルでの合意とアプローチの共有である。情報概念の統合に関するいかなる試みも困難に直面し、系統的な概念規定はその試みすら稀にしか行なわれず、多面的な指示対象を持つ変幻自在な用語として価値を見いだす者の多い状況が続くのであれば、求心力や規範形成力を期待することはできない。

そこを押して情報学の中心は情報であると定置したとしても、情報とは対象である（物体や実体でないとしても、何らかの現象として研究の対象となる）と見なした上で「情報学の主たる研究対象」と位置づけるのか、それとも、情報とは対象の側面または特質の名称であると見るか（そして、情報学は事物の捉え方によって特徴づけられると考える）といった基本的問題に悩まされつづけ、それで仮に個々の主題領域が豪勢に繁栄したとしても、全体として組織化されていないなら、富の蓄積を数え上げることすら困難となるのではないか。

情報の概念について、系統的理解という水準で明確な合意が得られるか、または何らかの帝国主義的圧力を持つ要請が与えられるまで、正体不明なまま、情報学におけるどの領域で

も使用できるものとして reserveしておいた方が実利的ではないか。そうであれば、中心にあると考えるよりも、他の多様な現象または問題と結合しながら、情報学という宇宙全体に散在する、普遍的な、それゆえにありきたりの概念として待遇することが適切であろう。

### 3.2 それは社会や人間か

情報に次いで容易かつ明快な回答は、「社会」ないし「人間」である。社会科学的探求はもちろん、工学や数学によるアプローチであれ、情報が社会に寄与すると見なして取り上げる限り、「情報学は社会を探求する領域である」「畢竟、人間に関する探求にはかならない」という種の言辞がある種の吸引力を有する。情報とは何かなどという難題に関する説明責任を免除され、多彩な主題を涉猟しながら過ごす至福までも期待させる。

しかし、単に社会または人間にかかわる情報を扱うという程度の取り決めでは、範囲を合理的に説明することはできない。まず、「情報を扱う何か」をヒト科の生物以外に拡張することは容易であり、脳や一定レベルまで発達した神経系を有する生物、さらに生物全体へと続くスペクトラムに恣意的でない境界線を設けることの方が難しい。そうこうするうちに微生物まで許容されるならば、その頃には、情報を扱う機械をも（道具や経路ではなく）情報を収受する主体と見なして対象に含めようとする動議に抗えない。

情報を扱う主体とまで考えず、社会または人間の周囲や合間にある因子と位置づければ、機械や微生物、さらには生体内の機関・機構を探求の範囲に組み入れることに抵抗はないかもしれないが、それらは単体として機能するわけではないから、生物個体ではなく個体群や生態系をも情報にかかわるシステム（そしてある種の社会）と捉える考えへと延伸せざるをえず、最終的には「ガイアとしての地球」のような概念を許容することになるかもしれない。こうして、いつの間にか、社会や人間の領分として想定した範囲を逸脱することになるが、もししかるべき合意を取りつけて範囲を限定したとしても、その範囲内に、政治・経済・人権あるいはその下位概念というように、種々の伸縮自在の概念が部分的に癒着しあいながら折り重なるところを系統的に組織化する術を持つことができるだろうか。

範囲の曖昧さもさることながら、より根本的な限界は、社会であれ人間であれ、特定のアプローチや方法論に基づいて規定される概念を前提としていることにある。つまり、それらはすでに対象化された何かであって、先述の膨張宇宙の比喩においては、「小宇宙の側のもの」ということになる。対象化の可能な事象がすべて中心部から離れ去ったという前提をいま一度確認する必要がある。

### 3.3 それは思考または認識か

情報にかかわりそうなもので、対象化されないもの。それは、思考または認識なのかもしれない。基本的な、情報を考える際に不可欠・不可避の事柄であるから、それが情報学の中核に位置するのであれば、非常に好ましいようにも思われる。

ある時期まで、思考や認識の問題は情報学の範囲外だった。それらの語に言及するだけでも憚られた。だがそれは、情報学を科学であると認定してもらおうとして、心や思考が科学の対象となりえないという通念をさしたる検討なしに受け入れたためである。それに対し、認知科学を主要な隣人と認めるようになり、やがて職業哲学者の参入も得た以上、そうした事象も十分に情報学の範囲内に収まると認められたと考えてよからう。

ただ、そうであれば、それはそれでまさにある種の対象として認められたことにほかならない。学際領域の代表例と見なされる認知科学であれ、学際というより超越的領域であるかもしれない哲学であれ、それぞれ一定の伝統と成果を共有する学術分野であることにはかわりない。そしてそれらの助力が有効であるなら、その探求の営為は個別主題領域として異化され、中心部から離れることにならないだろうか。

この反論が妥当なら、もはやあまり選択肢はない。このまま他に回答が得られなければ、そこ（情報学の中心）はいわば完全な虚無ということになる。そうなれば、確たる構造を持たずに拡散しているこの分野を把握的に理解するという目標は、気の遠くなるような彼方に遠ざかる。

### 3.4 最後に残るもの

認知過程や思考・認識について、認知科学の方法論によって明らかにされるか、哲学者たちの開発した種々の装置によって見えるものという前提で論じた。そのためにそれら特定の領域に依存し、普遍性を持たないと結論づけることになった。しかし、この難物は、既存のアプローチによって完全に明らかにできると考える方がむしろ安易なのかもしれない。したがって、まだ何かが残されているかもしれない。

一つ指摘できる点は、それを思考または認識と呼ぶにせよ、認知過程と呼ぶにせよ、総じて一般化を志向している点である。つまり、そのために概念が形成されることになる。そこに手がかりがあるのではなかろうか。

認知や思考・認識から少し焦点をずらし、「思考する自我」であればどうだろう。一般的な認知のメカニズムや思考の方法・様式であれば対象化できるかもしれないが、思考する自我は常に対象と反対側にあり、すなわち対象化されえない。一瞬でも時間を隔てた（過去の）自我であれば、記憶という残滓を拾い集めて何がしか理解できそうであるが、この、いま思考を続けている自我を理解することはできない。

情報学の宇宙の中心部に残された何かとは、この対象化されえない自我ではなかろうか。

### 3.5 それはコギトではない

この着想は、よく知られた考えを想起させる。すなわち「コギト」(Cogito, ergo sum)である。

しかし、コギトの再発見を行なうためにわざわざ労をとるものではない。この点について

は、ひとまず、コギトは人類にとってただ一回預言者に下される天啓のようなものではなく、すべての個人において起こりうる経験であるという主張を以て回答としておく。それ以上に、その先に分岐がある。この延長で科学的認識の確実性や物質・空間・時間といった問題を扱うような偉大な計画はなく、他者や身体といった論題に参画するつもりもない。

次章では、情報学の統合的把握という目標へ向け、ここから先へと進む道筋を検討する。情報学の中心を特定したと言っても、膨張宇宙の爆心に取り残されたものを探すという喩えに導かれ、対象化されない（個別主題領域にからめとられない）ものに注目したというだけである。そのことによって情報学に対する理解が保証されるわけではない。中核として全体に寄与するような特質や作用が必要である。そこで、まず、この着想を展開可能なものにするために議論を加えた上で、そこからどのような示唆が得られるか、検討を行なう。

## 4. 議論

### 4.1 始原への回帰

対象化されないものを追い求めた以上当然であるが、どうにも空虚な帰結に至った。情報学の中心は思考する自我であると説かれても、即座に豊かな学術世界を生み出すとは誰も思わないことだろう。再び比喩を用いれば、天体の超絶的な爆発の跡に残される中性子星のように、不毛である。

しかし、そのこと自体から、重要な示唆が得られるかもしれない。思考する自我という語で言及したそれは、本来、名付けることも不可能である。他の実体や現象と比較することもできなければ、相互の関係に基づいて捉えることもできない。つまり無に等しいわけだが、まさにそのことから、われわれの世界の始原に近づくための着想が得られるのではないか。

精神の発達において、「自分」が予め神のごとく在るわけではない。最初から一人称があるはずはなく、まして、自我と意識されることもない。自分も分からず、したがって何も分からないまま、生物学的な行動をとるだけだったことだろう。客観的・科学的に見るなら、それでも生物として、ひょっとすると多くの動物より顕著に異なる意思決定を行ない、そしてそれを機能させる程度の「自分」を持っていたのだろうが、とてもそれを「思考する自我」と呼ぶことはできない。

転機は、言語の獲得だったに違いない。言語能力が後天的に得られるものであるにせよ予め組み込まれているものであるにせよ、まずは他人の言葉との接触を契機として言語を用いる方法を習得するものだろう。そしてそれは、認識や思考に関する機構の形成を促し、翻って、自分自身を確認する機能をも生じせしめたことだろう。そのうちに、自分の周囲は言葉に満たされていく。

自我が対象化されえず、つまり自分の背中は見えないなら、むしろそこには言葉だけがあるといえるかもしれない。また、この推測の連鎖に従うなら、図式を「まず言葉があり、自

我がある」と修正する必要があるかもしれない。しかし、言葉が先立つとしても、「ふと気づけば自分がここにいる」という事件ののち、その自覚が持続する中であらためて言葉に取り巻かれていることを再発見するものだろうから、順序はともかく、「思考する自我」と言葉の二つが基本的因子であると認定しておこう。

さて、ここでは、「言葉」という日常語をあえて用いた。できるだけ言語学や記号論の概念装置にかかわることなく、発話や語られた(る)ことを包括的に概念化するためである。こなれぬ表現である上に、情報学への道のりがはなはだ遠いから、ここでこの語を「情報」へと読み替えることができればよさそうだ。たとえば「自分を取り巻くもの」の範囲に sense data を含めようとするなら、言葉以外の語を追加するか、言葉という語の定義の拡張を必要とするだろうし、幼児がテレビ番組の画像を楽しむ様を「言葉を受けている」と捉えるのははなはだ無理がある。

しかし、この議論の出発点は、思考する自我である。それは、言語に依存して論理的思考を展開し、その機能によって「外界」や「他者」を認識しており、そして sense data なるものはその間に「いつの間にか」処理されているのではないか。テレビ番組の画像を楽しむにしても、ある種の記号処理と知覚との混合として記述できるのではないか。つまり、まず主要な因子は「言葉」であり、ほかにも各種の情報が処理されるとしても言葉の力に基づくと考えることができないか。

代案として、メッセージという語ならば言葉という語とも情報という語ともつながりが大きくよさそうに思われるが、いずれにせよそのような読み替えを行なう場合、当然ながらそれぞれの語義の系統的調整が必須の前提となる。性急に読み替えても、わかった気分だけを心得問題を先送りすることになるまいか。

何より、情報の概念は人類にとって後発である。幼時から「こういうものが情報である」等々と指南を受ければ、自然なかたちで情報がそこにあると思うことができるようになるかもしれないが、それは言葉の作用によることにほかならず、そして言葉ならば、そのような手続きを経ずに自明のものとして常に周囲に感ずることだろう。そして、もっと自明なこととして、「私」はここにいる。そのような確実なところから出発すべきではないか。

急ぐ必要はない。情報という語へと置き換えるにせよ、まず自我とその周辺で何が起きているか、探求を重ね、概念系を整備した上で移行することが得策であろう。

他方、この「言葉」という語に劣らず、自我という語もこなれぬ表現かもしれない。重力が過大で光を放たないブラックホールのようなもので、ある意味では色彩に乏しい点がかえって好ましいとしても、その後の展開に困難が予想される。

ここまで、試みとして「私」という一人称や「自分」という語を織り交ぜたが、それらはもちろん用語法の点で紛らわしいことこの上ない。情報学における展開に寄与するような代案はないものか。

## 4.2 ヒューマニズムという解

日本において情報研究領域を考える際、多くは工学や数学のイメージを動員して理解し、理学と扱うことすらある。情報化社会論やマスコミュニケーション論などのアプローチを引き込んだとしても、全体が社会科学と見なされることはまずなく、得てして、扱いに苦慮して学際または総合領域というラベルを用意することになる。米国においては、情報学をあっさり社会科学の一つと見なす。しかし、学問の性格を論ずる局面となると、自然科学や工学の側面が指摘されることもある。

このように、理念・見解・利害の相違のみならず便宜上の判断も交錯するなか、ふと気づくのは、いずれの文脈においても情報学を人文学であると見なすことはまずないという点である。その背景には、近代科学に対する崇拜・憧憬ゆえに人文学へと積極的に目を向けられず、言及したとしても低い位置に置くという傾向が寄与していることだろう。しかし、とくに学際的な領域であると考えられる場合、部分に限定すれば人文学の側面を見いだす者は珍しくないし、実際にいくつかの主題領域は人文諸分野の理論や方法論を導入したり、相互の通交を持つ。

また、日本において米国の伝統を踏まえた情報学研究を行なう者はおそらく図書館情報学というシェルターの中で活動し、その図書館情報学教育機関のうち、学科単位として日本初の例と最後の例はいずれも、私立大学文学部に設置された。その位置づけに必然性はなく、また説得力のある方針に基づくものでもなく、文学部が総記分類のような役割を持つことと、図書館に対するある種の受けとめ方（「文学の館」と見なす心性）に促されたりしたのかもしれないが、しかし、全く異質な場を選択するわけもない。

少なくとも人文学の因子が情報学の一部として組み込まれていると見ることにさほど無理はないだろう。そして、看過されがちな側面であるからこそ、情報学について根源から探るこの作業に何か寄与するかもしれない。

人文学に属する諸部門それ自体は、単に個別学術分野であって、再び膨張宇宙の比喩を用いれば、情報学にとって、特定の問題領域と結びついて小宇宙を形成する外挿要因である。相対的に遅れたとはいえ、言語学や歴史学はもとより、哲学ですら情報学の主題領域に寄与するようになって、とくに何か言及すべきものは残っていないかもしれない。しかしこれは、人文学を近代科学の形成論理に招き入れて読み解いたためである。人文学には、それ以外にまだ残された因子があるかもしれない。そこで、分野の類別のための語である humanities ではなく、少しずつして humanism について考えてみてはどうだろう。

人文主義と訳されるそれは、近代社会を特徴づける知性と行動様式の源泉である。それを慣例に従って社会構造・経済制度による抑圧からの解放や近代自我の獲得といった話題の中で扱うならば、再び特定の概念、あるいは価値観と結びつくことになり、この議論の趣旨に合わない。同じ理由で、博愛主義あるいは隣人愛としてのそれに期待するわけではない。しかし、それらが適用可能な解のすべてではないはずだ。そしてそれら種々の解の背後に、さ

まざまに分化・展開可能な、いわば原初的なhumanismを想定できる。

そのような原初的なhumanismは、きっと初期の科学には主要な構成成分として組み込まれていたもので、そこから分化して成立した諸分野においても根底にあるのではないか。そうであれば、波及の範囲は人文系諸分野に留まらないから、やや特殊な経路で発達したとはいえ仮にも諸科学の一部門である情報学においても、どこかに痕跡器官のように含まれているかもしれない。そしてそれは、この過程で展開することなく活用もされず取り残され、原初の姿を留めているものと期待される。そのようなものなら、情報学の中心に残されたものを、別のアプローチから記述してくれるのではないか。

そのような何かを包括的に表すため、humanismという語をきわめて素朴に「ひとであること」と解してみよう。そして、「人間」(社会学的な)や「ヒト」(生物学・動物行動学的な)などの既成概念からの解放を志してみよう。そうすれば、「思考する自我」の把握のために役立つものとなりそうである。

前章の帰結は、自我という語によって、孤独の相を強調している。この間の一連の展開に従えば、自分以外の存在を暗黙のうちに／自明なものとして認めることができない。そこに、他者(他人)の概念を投入しても、異物感がある。対し、「ひと」という語には、その点を補正する力を期待できる。

たとえば、他の人間が自分と同じようにものを思う存在であるかという問題は、幼児の抱きそうな疑問の一つである。当然ながら周囲の人間にとっては倒錯した問題設定であり、とくにその相手がその幼児の知的発達を促した主要な存在である母や父であったなら、思い上がりも甚だしいと切り返すことになる。しかし、言い聞かせられても素直に納得できない場合、解決は困難で、とくに系統的に対処するには相応の長い時間をかけて一定水準の理解を獲得する必要があるから、通常は別の方策を採って事を収めるはずである。たとえば自分から見えないところに自分と同じものがあると仮定してみる。そうすれば、おおむね事がうまく運ぶので、以降そのように理解することになるだろう。

こうして、自分自身に加えて自分に似た何かを仮定したときに形成される概念に、「ひと」という名を与えてみる。この語を得れば、既成の概念の助けを借りず、そして素朴実在論に支配されることなく孤独を回避することができそうである。

こうして得られた世界観においては、自分という別名を持つ「ひと」がまず在って、そのまわりを言葉が取り囲む。自分のまわりの言葉がときに動き変わることから、自分とは別の何かの介在を想定することができる。おそらく、それら言葉の層状に折り重なった向こうに(しかしながら層を取り除いたとしても見えることのないどこかに)誰か別の「ひと」がいる。そのような「他のひと」は、言葉の動き変わりによって確認され、またその作用を通じて自分の世界に参与する。

言葉は言葉としてそこにあるだけでなく、むしろ通常、種々の像をわれわれに見せながら自身はそれら像のものかげに姿を潜ませる。たとえば「人間」や「ヒト」などの語によっ

て、他人の姿が遠近そこかしこに見えてくる。したがって、日常においては、「言葉の彼方に」他者を想定しなくても別段孤独だと思わないかもしれない。しかしそのような人間やヒトに囲まれた構図は、常に好ましいものとは限らない。そのとき、それらの像の内側に、自分と同じように震える魂があることを推定することができれば、社会学的・生理学的に他人と接するよりも、時として悦ばしいものではないか。

さて、依然として情報という語ないし概念は登場していないが、「情報学の中心に、思考する自我がある」という命題よりも、多くの示唆が得られるようになった。

## 5. 結論

本稿は、情報学が離散的な状態にあるという問題設定の下で、情報学を統合的に把握する手がかりを求めた。個々の研究対象および課題がそれぞれ他の学術分野のアプローチ・方法論および成果と結びつくことによって個別主題領域が形成され、その結果として特定のアプローチや概念によって対象化される事象はいずれも情報学全体の共通属性ではなく特定の主題領域の属性となったと見なし、それらを除外していくと、最後に、対象化されえない「思考する自我」だけが残されることを導出した。次に、「言葉」と「ひと」という原初的な2語によって言い換えることによりこの着想を展開可能なものにするという解を与え、それを全体の帰結と位置づけた。

今後、以上の筋立ての検証という遡及的作業が必要である。しかし、この帰結が誤りであるならそれまでだし、妥当なのであればそれもそれだけのことであるから、この帰結から出発し、先へと進むことがより一層、重要である。

さて、この最終的な帰結に至る過程で、人文との遭遇に示唆を得た。それは、「社会科学のくびきからの解放」のための援軍でもある。

米国で形成された情報学は、社会科学と類別され、基本的に社会的活動を取り扱う。そして中でも、情報・知識の社会的蓄積、あるいは社会の共有記憶に焦点が当てられる。

人間は確かに社会的な存在であり、普通に考えて、そうではない。だが本人にとって、個々人にとって、それがどれだけの意味を持つか。社会の恩恵を受け、またそれに期待して生きる一方で、社会によってしばしば害を被る。そのとき、社会がどこまでも追いかけてきたら、やがて疲れ果ててしまう。情報についても、どこまでも社会に結びつけて考えるなら、同じように疎外という結末が待っているのではないか。情報活動が、すぐれて個人的な営為であること。そう了解することが、そのような事態を回避しながら学を構築する道ではないか。

この着想を延長すれば、「私が私でいること、それが情報学の基盤である」という考えに行き着く。つまり、個々人の情報に関する経験や自分なりに情報について考えたことが情報学の基礎となり、個別主題領域の成果や研究過程との相互作用を通じてそうした個人的知識

がアカデミックな研究活動と結びつき、適切な学術の発達に寄与する、というわけである。それはさらに、離散した個別主題領域の間に血流のような連絡を与え、全体の有機的結合と活力とをもたらすかもしれない。

ただ、この考えがそのまま文字どおり、単に日常の知識と科学的知識の互恵という解で把握されるのであれば、目新しくなく、また利も少ない。それを避けるには、その思考する自我の行動様式（ふるまい）を調整する必要がある。「私なりに考えた」としても、個人の領域で日々を過ごしながら時折何か感じ思うということに留まるなら、実際には既存の言葉の助けを借りることになるものである。たとえ「すぐれた」「新しい」ものを探すことに尽力したとしても、他者の言葉を利用する限り、どこかで誰かが考えたことを反復するだけであり、それでは文字どおりに私的価値しか得られない。

せっかく、思考する自我という根源へと到達したのだ。ひとりひとりが真に思考する自我として在ること。そのために言葉に囲まれながら思考を続けること、言葉と自分の織りなす事象を見据えること。そのような熟慮を重ねてこそ、何か情報学の原資となりそうな営為となるはずである。当座は、いや最後まで、大した考えには至らず、結果的に、誰もが口にするような言辞と文字表現の上では等価となるかもしれない。しかし、みずから考えぬいて得たものは、確信度・安定度と応用可能性の高さにおいて、顕著に優れる。そしてそのように思考を重ねる者にとってこそ、他者の言葉が適切な価値を持つものである。

このように、本稿の帰結を展開するために要請されるのは、「みずから考えること」の強調である。この場合の「みずから」とは、何かの助けを求めず自力によるという意であるが、そこに留まらず、内的動因に基づいて思索するという側面をあわせて強調することがよからう。さらにつづいて、「孤独に」という含意も重ねてみよう。

本稿の所論から見える「思考する自我」は、ひたすら言葉に囲まれており、孤独である。言葉の向こうに他の誰かがいると感じたとしても、そのことから何かを期待できるかどうか、わからない。言葉は多くの助力を提供するものの、ときに制約や障害をもたらし、主として格闘する相手だから、すがってはならない。まず、ひとりであること、孤立無援であることを享受し、それを出発点として、自身を助けるために自身のできる限りを尽くして思考を進めること。それが肝要だ。

そもそも本稿では、まさにそのような方針を採用して論を開始した。それは、根源に遡って考究するという目的に即した選択だったが、それによって得られた帰結が、翻って方法論それ自体を（再帰的に）保証したことになる。とは言え、そこで完了すれば単なる循環過程であるから、その「みずから考える」営為を持続することが求められる。

これらの成果は情報学に対しすぐに大きく貢献するわけではなく、道のりはまだ長そうである。しかし、光は見えてきた。これをはじめの一步として、楽しく旅程を進めることにしよう。